

考えよう 情報社会の光と影

技術の発達によって、以前では考えられないほど情報の発信や収集が容易になってきた。その利便性に、私たちは様々な場面で恩恵を受けている。

インターネットなどの情報手段が個人や社会に及ぼす影響を十分に理解し、正しい判断ができるよう、情報社会を生きる一員としての自覚を育てていこう。

離れていても伝えられる

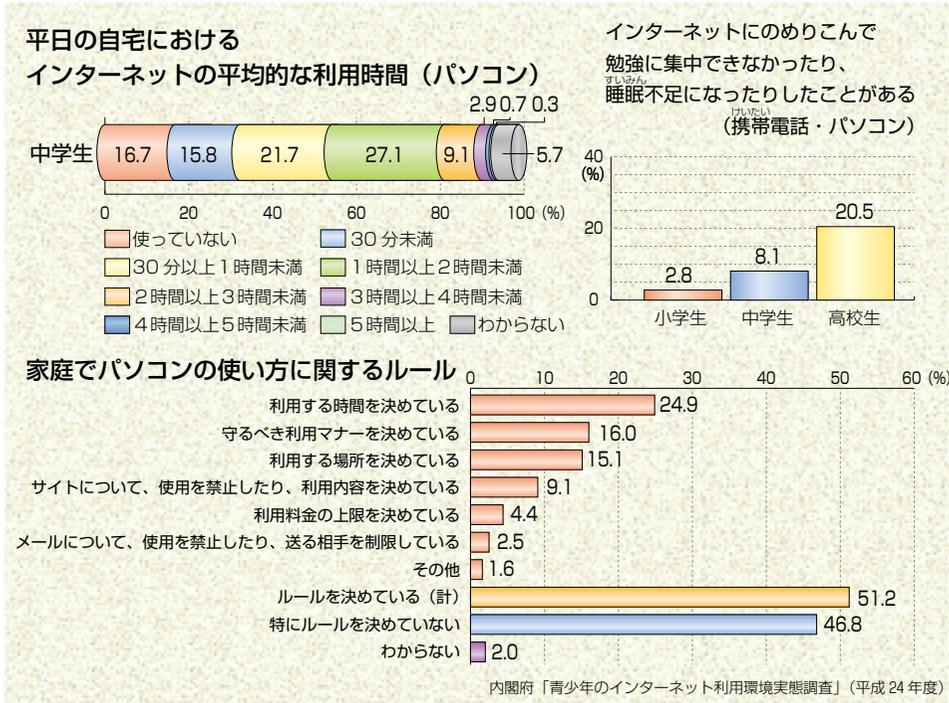
電子メールなどのやりとりによって、普段は会えない遠く離れている人と交流ができたり、悩みを相談したり、言いそびれた「ありがとう」を伝えたりすることができる。



電子メールなどを使う際には、互いの顔が見えなくても相手の状況や気持ちを考え、伝える内容にも十分に気を配ってやりとりできるようにしよう。

情報化が及ぼす問題

インターネット上には、正しい情報だけではなく、間違っ^{まちが}た情報や、悪意のある情報も数多くある。また、節度のある使い方をしないと、健康までも害してしまうことがある。



懸念される問題

- インターネット上の情報を丸ごと信じてしまう
- 現実と仮想世界の区別がつかなくなる
- 生活習慣の乱れ
- 自分の意志でやめられなくなる「ネット依存」
- 心身の健康への影響 など

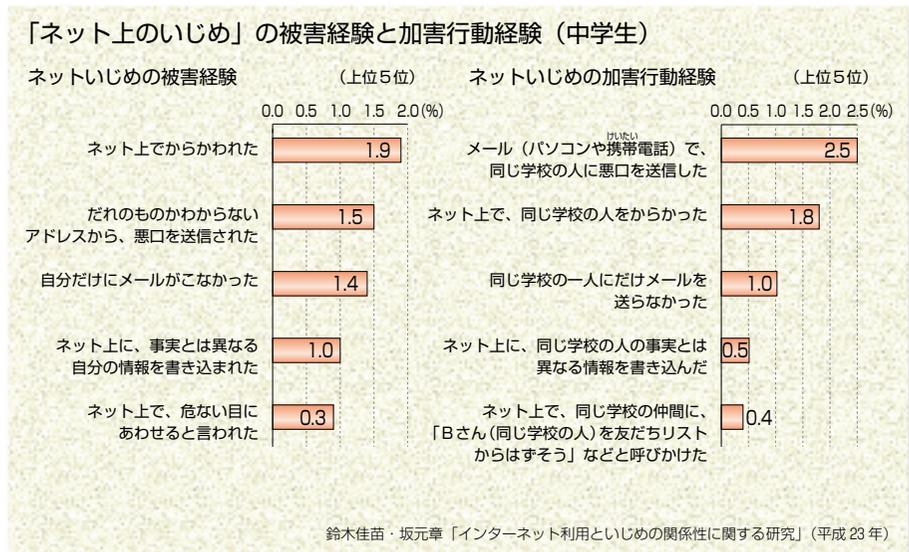
不安
イライラ
眠れない

生活習慣を崩さないよう、家族とも話し合っ^{くず}て節度のある利用法を考えよう。また、インターネット上の情報にアクセスしたり、情報をやりとりしたりする際、正しい情報か、自分が責任をもてるか、誰かに迷惑をかけないか、クリックする前に、よく考えて、判断しよう。

情報技術を利用した「いじめ」

陰湿で卑怯な行為である「いじめ」が、インターネットを介することでさらにその卑劣さを増していく。

相手の顔が見えないために、いじめの悪質さは一層エスカレートしていく傾向にあると言われる。



電子メールやインターネット上の掲示板等を利用して、特定の生徒に対する誹謗や中傷が行われる「ネット上のいじめ」は、他のいじめと同様に決して許されるものではない。私たちの周りで、このようなことが起こらないようにするためにはどのようにすればよいか、考えていこう。

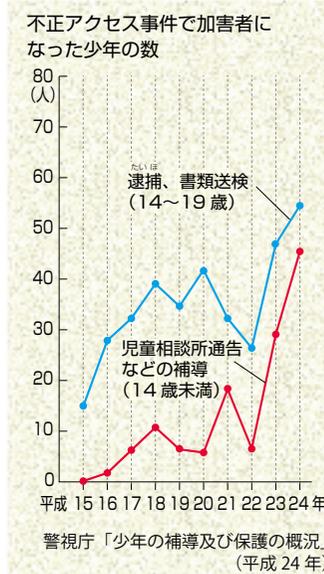
情報技術の発達に伴い、インターネット上での誹謗や中傷、あるいはメールを介したいじめやいやがらせが増えてきている。メールやSNS（ソーシャルネットワークワーキングサービス）を意図的に悪意あるコミュニケーションに利用する人もいる。情報社会の中で、あふれる情報に対し、適切に判断し、行動し、自分と相手を守るために必要なことを考えてみよう。

「分身キャラが欲しかった」SNSで女子中学生が他人のアカウント乗っ取る

××新聞○月△日

インターネットの会員制交流サイト（SNS）で他人のアカウントを乗っ取ったとして、〇〇県警サイバー犯罪対策課は県内の中学1年生の女子生徒を児童相談所へ通告した。同課によると女子生徒は5月、SNSのサイトで知り合った男子中学生に「コイン（仮想通貨）をあげる」と言ってIDとパスワードを聞き出し、無断でアクセスしてコインを自分のアカウントに移し盗み取っていた。パスワードを変更し男子生徒がアクセスできないようにしていたという。

ネット社会では、誰もが容易に加害者にも被害者にもなり得る。著作権や個人情報の保護、不正アクセスの禁止など法やきまりを守って適正な使い方をしよう。



絶対にしてはいけないネット

情報社会を生きる一人として

あなたの身近に いじめはありますか

あなたの身近に いじめはありますか

もし あるとしたら

あなたは

いじめを受けている人ですか

いじめをしている人ですか

いじめを止めようとしている人ですか

それとも

いじめとわかっていながら

何もしない人ですか

卒業文集最後の二行

一戸 冬彦

「思い出となれば、みな懐かしく美しい」と俗ぞくに言われるが、それは過去を美化しているか、時間の経過とともに風化してくれるのをよいことに、つらい体験や苦い思い出を忘れようと「努力」しているに過ぎまい、と私は勝手に解釈している。

生来、気位きゐが高く、不遜ふそん極まりない性格の私だが、こんな私でもこの場を借りてごんげしたい、いや、せずにはいられない出来事できごとがある。深い深い後悔こうかい。取り返しのつかない心の傷だ。

時は、小学校時代に遡さかのぼる。

同級生にT子さんという女の子がいた。彼女は早くしてお母さんを亡なくし、二人の弟さんの面倒めんどうもみなければならなかった。お父さんは魚の行商ぎょのこうじょうである。

つまり、Tさんは母親代わり商品を持って売り歩く商売のことといってよい。しかも、お父さんの仕事があまりかんばしくないようで、経済的にも恵めぐまれず、その頃の時代にしても彼女の服装はみすばらしいというより、正直言って汚きたかった。

今にして思えば、経済面からもそうであろうが、母親代わりという生活環境かんきやうから、自分の身の回りを構かっているどころではなかったであろう。

そのTさんが、六年生のとき私の隣の席とまりになった。加えて、運の悪いことに彼女よりちよつとばかり成績も良く(もつともTさんも上位の成績だった)、金銭的にも幾分いくぶん恵まれた生徒たちが彼女の席を取り囲む形になった。

生意気で口の悪い私は、先頭に立ってTさんをけなした。

「きたねえから、もっと離れろ。」

この私の言葉に悪童たちは、更にはやし立てた。

「臭いがら、誰もT子に近付くなじゃ。」

「毎日風呂さ入って頭を洗って来いよ。」

こうした嫌がらせにも、T子さんは泣きもせずじっと堪えた。ほおを紅潮させながらも歯を食いしばって、涙を見せもしなかった。泣いたり涙を見せたりすると、我々にもっとばかにされ、いじめられると思ったのであろう。



しかも、T子さんは、担任に一度もそのことを言わなかった。担任のM先生は校内でも屈指の怖い先生なのである。M先生に告げれば我々はこっぴどく叱られ、自分も一層惨めになると考えたのではない。卑怯な我々は、T子さんが担任に言わないのを知って、更に輪をかけて口汚く罵り続けた。

そんなある日、クラスで漢字の小テストが行われた。

問題用紙に、どうしても書けない漢字が、私に二個あった。困った私が隣のT子さんの答案用紙をチラリと盗み見ると、彼女はちゃんと書いていた。しかも、正答である。それとばかりに、私はカンニングをした。

後日、答案返却があり、その際にM先生が私を褒めてくれた。

「イチノへ、よく頑張ったな。満点はお前一人だけだぞ。」

私は後ろめたさを少し感じただけで満足だった。何しろ、満点は私だけなのだから。

だが、その後に渡されたT子さんの答案用紙を見て、私はがく然を通り越して目の前が真っ白になり、同時に真っ暗になった。なんと、T子さんは一個だけの間違いで、九十八点なのだ。私がカンニングをしなければ、T子さんは満点ではないが、最高得点者ということになる。

私は弱者であった。勇気がなかった。卑劣な人間だった。T子さんは私がカンニングしたことを知らないようである。それどころか、T子さんは皮肉などカケラもなく、

「さすがイチノへさんね。おめでどう。」

微笑をもって心から言ってくれたのだ。それに対して私は、

「問題が易しかったからな。」

と、臆するところもなく当然のように応えた。さらに、そんなT子さんに、もっとひどい追い打ちが待っていた。授業の後、T子さんの答案用紙を例の悪童どもが見て、

「イチノへの答えを見て書いたんだろう。」

「お前が九十八点も取れるわけがねえよ。」

「カンニングしてまで、いい点数を取りたかったのか？」

と、口を極めて彼女に中傷の矢を浴びせた。さすがの私も、このときはこの中傷に加われなかった。ところが、連中があまり騒ぎ立て、T子さんを責めているのを聞いているうちに、私の心の中の後ろめたさが消え、逆に連中の尻馬に乗る発言をしてしまった。

「やっぱり、おめえは私の答えを見ただらう。見だに決まってる。ずるいと思わねえのか。」すると、T子さんは泣き声で、

「私はイチノへさんの答えは見ではありません。着てる物や髪はきたねえかもしれないけど、心はきたなぐねえです。」

と、机に顔を伏せた後、

「私をどこまでいじめれば、皆さんは気が済むの!」

叫びながら石炭小屋のある方へ走って行った。T子さんの初めての泣いたり叫んだり、その場から逃げ出したり言動に、悪童どもは言葉を失った。私は彼女の後を追いつけて、土下座して謝りたい衝動に駆られたが、その度胸も勇気も瞬時にして吹っ飛び、それどころか連中を前に、

「ほんとのことと言われたんで、あれほど怒ったんだ。私の答えを見て、めぐせえ(恥ずかしい)と思わねえのかな。」

と、胸を反らせた。

石炭小屋から戻って来たT子さんは、涙こそ拭い収められていたが、目をうさぎのように充血させ、まぶたを厚く腫れさせていた。

……やがて、卒業式を迎えることになった。

私はどうとうT子さんに謝らずじまいで終わった。

だが、式の日配られた「卒業文集」をその日の夜に家で読み、私は枕をぬれにぬらしてしまった。T子さんの作文の、特に最後の二行が私の涙腺を果てもなく緩めたのだ。

『……私が今一番欲しいのは母でもなく、本当のお友達です。

そして、きれいな洋服です。』

この二行に、T子さんの思いの全てが込められている――。

その理由は、改めて書くまでもないし、書く必要もあるまい。

あまりに切なく、つらく、悲しすぎる……。

それにしても、私は随分とT子さんにひどい仕打ちをし続けたものだ。謝罪しても謝罪し尽くせるものではない。許しを乞

うても許されるものではない。三十年余りが過ぎた今でも、T子さんへの罪業を思い出すたびに忍び泣いてしまう私である。

あの「卒業文集」の最後の二行は、大きな衝撃だった。大いなる悔いを与えてくれた。あの二行を読まなかったら、現在の私はどうなっていたであろう。

●「卒業文集最後の二行」を読んで、あなたが感じたこと、考えたことを書いてみよう。



「卒業文集最後の二行」を読んで感じたこと、考えたこと

私はいじめられている人を見て笑ったことが何度かあります。私は小学一年生のとき、いじめられていたことがありました。いじめられるのが好きという人は一人もいません。いじめられたことのある自分なら、いじめは嫌だし、笑われたくないとその子が思っていると分かっているのに、人がいじめられているのを見て笑いました。ひきょうなのは私がやったような、自らいじめをしているわけでもなく、見て笑っている人です。(中二・女子)

いじめた人は一回、一日一日の学校生活の自分はどうかなのか、ふりかえてみるのもいいと思います。そうしたら、自分はこんなことをしたんだなど、自分がバカだと思えてくると思います。それを知ったら母はどんなにきずつくのか、いじめられた人もきずつくけど、その周りの人もきずつくと思いました。(中一・女子)

いじめは被害者が傷つくから、だめなものだと思っていたが、もちろん被害者は大きな心の傷を負うけれど、加害者やそのまわりの人も傷つくものなんだということがわかった。いじめはその場にいた人全員を傷つけるものだし、時間が消してくれるようなものではないのだと思う。(中三・男子)

自分もここまでではないにしろ、人の外見などをけなしたことはあります。でも、謝ることはできませんでした。周りから嫌われるんじゃないかという不安、心配がまわりついて離れませんでした。自分は間違っていると気付いていましたが、自分を正当化することしかできませんでした。こりっしている人に謝り、味方になるということは相応な勇気と優しさが必要だと思います。(中二・男子)

ぼくは全部の立場になったことがあります。自分もいじめていたときがありました。ですが、自分がいじめられて、いじめられている人の気持ちがいじわかったような気がしています。いじめる側はいじめていることを楽しがっていると思います。今日、やっぱり、いじめをうけている人は、ここまで苦しんでいることがわかりました。(中一・男子)

いじめた人が強いわけじゃないし、いじめられた人が弱いわけじゃない。本当はその逆で、いじめる人の心が弱いために、弱い心をかくすために、他の人をいじめるんだと思った。(中三・女子)